

さくら染め布の色彩分析

—第2報 緑葉の色素抽出効果—

清水尚子・山口律子

環境負荷の削減のために日常利用で退色し外観性は低下しているが耐久性は残っている布を身近な染料素材で手軽に染め直し再利用することも念頭に置き、第1報のサクラの小枝に続き第2報では生の緑葉と乾燥させた緑葉を染料素材とし、色素抽出液を染液とする染色において染料素材の使用量の違いが色素の抽出量や染色布の色度のバランスに及ぼす影響を比較検討した。その結果、白布を桜花のイメージに相応しいピンク系やローズ系の赤い色に染色する場合、1回目の抽出液よりも2回目の抽出液の方が色素抽出効果は安定しており、緑葉をきざむ手間を省きそのままの大きさで使用しても染色布の視覚的な赤みの度合いに遜色が無いという知見が得られた。

インクルーシブ保育へのレディネス

早川 淳・野村 弘子
早川 稔

一人ひとりの子ども達がウェルビーイングに育ち、生きる力をつけていくことが保育の目的であり、それがインクルーシブ保育に繋がっていく。

本論では、統合保育を実践している、また、しようとしている18園の保育士114人の記述から保育現場での実態を踏まえ保育園を視点として検討した。

障害のない3歳児に保育の難しさがみられたことは発達過程の途上にある行為や態度である。また、保育の難しさはコミュニケーション力の弱さと対人関係の拙さであるために保育方法や保育支援を考慮していくことが重要であることと統合保育を実践している保育園ではインクルーシブ保育へのレディネスができていく。また、実践されているとの知見を得た。

問い直されたホームヘルプ労働のあり方（1970年代～1990年代）

—東京都のホームヘルパーの取組みを中心に—

渋谷 光 美

1980年代以降、ホームヘルプ事業は、民間活力の導入による供給主体の多元化、サービスの有料化とともに、ホームヘルパーの非常勤化・パート化が推進された。本研究は、その過程でホームヘルプ労働のあり方が、いかに問い直されていたのかを、ホームヘルパーの側から把握し検討することを目的とした文献研究である。本稿では、東京都における動向に焦点化した。主婦なら誰でもできる労働であるとの表面的な理解に対し、派遣対象者には、専門的な援助が必要とされる生活実態があることを、事例検討を根拠に明らかにし、住民側から求められている支援ができる労働体制と業務拡大、実践方法の検討の場の保障も含めたホームヘルプ労働のあり方を提言していた史実や、その重要性を確認した。

介護保険制度における要介護状態区分と要介護者の体力および生活状況

西 口 初 江

介護保険制度における介護サービスを提供する介護施設において介護者が適切な介護支援を行うためには高齢者の機能低下の程度を日常生活状況や体力の現状から正確に把握する必要がある。さらに介護者の生体負担を軽減するためにも介護技術の向上や要介護者の介護の等級に応じた適切な介護方法を行う必要がある。

本研究では、要介護状態区分1～5の高齢者を対象に体力や生活状況の現状を調査し、認定調査の「基本調査」項目である「移動・複雑動作」に含まれる項目を参考に点数化し4段階に再区分することで現行の介護度区分との違いを検討した。さらに高齢者の日常の身体機能である体力（握力・棒反応時間）測定し、要介護区分や新しい区分と要介護者の体力との関係を検討した結果、現行の要介護状態区分は高齢者の体力、日常生活内容を的確に把握し判定区分を決定しているとは言い難く、本研究で実施した「移動・複雑動作」における再区分は高齢者の体力を把握するためには有用であることが示唆された。